

実地に見た コソボの現実

AMDA 欧州担当顧問 小川 秀樹

国際医療ボランティアA MDA (本部・岡山市) 医療救援チームの一員として七月に三週間、コソボに滞在した。NATO空爆中にコソボで起こっていることについて危ぶまれたこと、実際に自分の目で見たことの間には、当然ながらかなり差はあった。コソボ紛争の真実をよりよく理解いただくために、自分で見た現地の姿を伝えたい。

アルバニア系が主人公復帰

表情明るい帰還民、復興に懸命

から北の地域に視察に出た。今度はかなり被害が目につく村々が続く。AMD

ま残っている。プリズレン

まいがそのま

古都のたたず

アパルトなどはまったくの無傷だ。破壊されたモスクとも相まって、アルバニア

系住民の生活・文化体系に

対する意図的

な破壊であることは一目瞭然(りようぜん)だ。

北東部に位置する首都

リシュチナはというと、郊外は別として、町なかの主な建物に対する被害は

出たセルビア系が、続々

南北を結ぶ橋の通行を嚴重に管理し、まるで二分割さ

れた町のような印象を与える。北側に家があるアルバニア系住民が橋を渡るのを拒否されるなど、混乱

の表情は意外と明るく、本来動き者のコソボの人が皆、懸命に復興に打ち

込んでいっているという状況だ。何よりもコソボの人たちを

の80%はアルバニア系だが、残りのセルビア系が町を横断する川の北側に住んでいた。そして今や、アルバニア系の帰還と入れ替わったように、各地域から逃げ出したセルビア系が、続々南北を結ぶ橋の通行を嚴重に管理し、まるで二分割された町のような印象を与える。北側に家があるアルバニア系住民が橋を渡るのを拒否されるなど、混乱の表情は意外と明るく、本来動き者のコソボの人が皆、懸命に復興に打ち込んでいっているという状況だ。何よりもコソボの人たちを

おがわ・ひでき 三井銀行総合研究所(現さくら総合研究所)などで海外調査に従事し、カンボジアや南アフリカ共和国などの総選挙で政府派遣監視員を務める。現在AMDA欧州担当顧問、さくら総合研究所客員研究員。岡山県鴨方町出身。現住所は横浜市青葉区。早稲田大政経学部卒。43歳。



る。このように、コソボの惨禍を実地で見ても初めて、NATO空爆の際にコソボで行われたこともおおよそ見当がつく。犠牲者の数は一万人を超えた。大変な数字だが、数週間で八十万人もの犠牲者を生んだ一九九四年のルワンダのように「虐殺の嵐」が吹き荒れたという状況ではないようだ。百人以上が(避)難民として居る。NATOの行動にはいろいろ批判もあるが、コソボに終止符を打ったというところから、今回の住民追い出しに先で再び一緒に診療活動を開始した。何と三週間のうちに三方所で診療活動を開始できたのである。地の利を生かして欧米のNGOが大挙して乗り込んでいるコソボでは、日本のNGOがそれらと競って物資支援を行うのではなく、こうした技能優先の支援活動に重点を置くのが大切かつ効果的かもしれない。